本宗のお題目と新興宗教のお題目の違い

長谷川　正　徳
（日蓮宗現代宗教研究所長）

何故、今頃日蓮宗のお題目と、題目教団である新興宗団のお題目との違い目を問題にしなければならないのかということであります。

「或る教団のお話を聞きました。また南無妙法蓮華経とお題目を唱えている。なんの抵抗もなく話を聞きましたが、檀那寺のお上人様のお題目とどう変っているのか知りたいと思います」とか、「霊友会・立正佼成会、しかもタスキに南無妙法蓮華経と書いてある。創価学会も南無妙法蓮華経だし、どこがどう違うのか」という質問が出ても、教学的、教学論理的にははっきりしていても、教化の次元でうまく説明することが難しい、どんな具合に話したらよいかというところから、今回こういうテーマ・タイトルでということになったのだと思います。これにつきましては、現宗研の主任である石川教張師が「法華教箋シリーズ」第一号に『お題目――南無妙法蓮華経の五字七字――』というタイトルで小冊子を出しましたが、ここに、「なぜ、日蓮宗のお題目でなければいけないのですか」という質問に対してこれに答えるという形で説明されています。これにつきると思いますので、読んで信者にお話し下されば、信者は納得いたします。しかし、これは初信の信者の為に書かれているので、この背後にある理論をしっかり踏まえていなければいけません。ここでは、石川師が述べている平易な表現の裏にある理論的なものを付け加えていきたいと思います。

「なぜ、日蓮宗のお題目でなければいけないのですか」

「お釈迦さまと法華経の心を心とし、日蓮聖人の教えにしたがってお題目を唱えているのは、日蓮宗だけです。日

蓮宗のお題目を唱えて心を浄め幸せと平安にみちた生活をきずいてゆきましょう」、これが答えですが、さらに細かく説明しております。「お題目そのものは、誰が唱えても、その功徳は同じです。ちょうど梅干を見ただけで口のなかがすっぱくなり、赤ちゃんがなにも知らずにお乳をのむように、一心にすなおにお題目の心をいただくことが大切です。けれどもこれは、お題目を自分勝手に唱えたり、お題目を授けられているお釈迦さまや、妙法蓮華経の救いや、お題目を伝えられた日蓮聖人をないがしろにしてよいということではありません」。これは、大事なことです。お題目を自分勝手に唱える主観的観念論が横行したことがあります。先日も共同墓地に檀家の人がお墓を建て、その開眼のお経に行ったところ、南無がなくて「妙法蓮華経」と示した塔婆が建ててあるお墓がありました。自坊の近所にも「南無」は唱えないで「妙法蓮華経」「妙法蓮華経」と唱える教団があるということを伺いました。これなどは全く自分勝手で、こういう形が教学から出てくることはありません。また今は無くなりましたが、昭和二十年代には、「南無妙法蓮華経」では南が無いのだが私の教団では、北が無い「北無妙法蓮華経」と唱えるという教団がありまして、これでもけっこう信者を集めていました。こういうようなお題目は、お題目を授けられたお釈迦様や、妙法蓮華経の救いのお題目を伝えられた日蓮聖人をないがしろにしているのでいけないことです。

「お題目はお釈迦さまのみ心をあかしたものであり、み仏の救いの心がこめられているものですから、お釈迦さまの救いのこころざしをはなれてお題目を唱えたり、妙法蓮華経の教えに背いてお題目を唱えていても、功徳をつむことはできません。かえって、地獄の苦しみにおちることになります。また、お題目はみ仏の使いである上行菩薩によって、今の世に生きる人びとを救うために伝えられてきたものです。この上行菩薩の自覚にたって、お題目を唱えるようすすめ、社会ぜんたいと人びとを救おうとはげまれた日蓮聖人にしたがって、お題目を唱え、心に仏の種をうえることが、本当にお題目を唱えるということなのです」、これが「宗義大綱」の示す「本門の題目」であります。今度、勧学院が生まれまして、教学研修会が開かれ、茂田井院長が「宗義大綱」の講義をなされ、その三秘の説明の「本

門の題目」のところで、「釈尊の悟りの一念三千を南無妙法蓮華経に具象したものである」とされていましたが、まさに本宗のお題目がこれであります。お釈迦様の悟りの一念三千を独自に具象したものであります。仏はこれを教法として衆生に与え、我ら凡夫はこれを三業身口意に受持して行法を成就する。ここに天台の立場と違うところがあります。悟りの一念三千、本仏果界の一念三千、この一念は如来の一念で果から因に向う南無妙法蓮華経であります。教法としての一念三千が与えられ、我々凡夫は行法として南無妙法蓮華経と頂く。つまり南無妙法蓮華経の七字は教法であると同時に行法であります。こういう理解にたって釈尊の御意を明かしたものが本宗の唱題であります。仏の救いの心が込められておる釈尊の悟りの一念三千ですから、私どもはしっかり教学論理をふまえ教えてあげなければなりません。

もう一点大切な事は、仏の使いである上行菩薩によって今の世に生きる人々を救うために伝えられたものであるという点です。上行菩薩の自覚に立ってお題目を唱えるようにすすめなければなりません。上行所伝の南無妙法蓮華経であります。神力品の「如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、皆此の経に於て宣示顕説す」。ここに五字の要法を末法の教えとして頂戴する根拠があるわけで、釈尊はこの神力品において上行菩薩に本門の法華経を付嘱せられた。末法の衆生の為の教えとしてわざわざ法華経の精要を五字の要法にまとめて授与されておるのであります。しかもこの妙法五字の要法こそ、釈尊の悟りのエッセンス、精要であり、結晶であります。末法の衆生の為に特別につくられた最上の「是好良薬」であるということを踏まえてこういう説明の仕方が生まれてくるのであります。佼成会などは上行所伝ではなく、庭野会長を開祖とし、会長先生の教えに基づいての南無妙法蓮華経であり、やがては宗祖ともなりかねません。創価学会でも、池田会長がかつて日蓮本仏論を唱え、やがて池田本仏論を打ち出そうとした野望があったと聞きますが、佼成会でもそういう傾向を持っております。また、それではいけないという反省が起っているのも事実のようであります。とにかく上行所伝、本化上行菩

薩をとおしての要法であるということを、我々は忘れてはならないと思います。

次に、「創価学会の唱えるお題目は、日蓮聖人を悪しく敬い、お釈迦さまをヌケガラとののしり、仏の種をうえるためではなく、自分の欲をみたすためのものです。これは、お題目にそなわっているお釈迦さまの心を捨てさり、なげ打ってしまっているのですから、あやまった唱え方です」とあります。

さて、この創価学会の唱えるお題目は、日蓮聖人を悪しく敬い、御存知の日蓮本仏論をもって、日蓮聖人を久遠元初の自受用身、人法一如の末法の本仏であって、お釈迦様は末法においては役にたたない、脱仏であるから末法の現在はお釈迦様を拝んでも謗法でこそあり、ご利益はなく、板曼荼羅即ち日蓮聖人を拝めばよいとしております。これは『血脈抄』とか『産湯相承』の中に出てきておりますが、また三位日順の書いた『本門詮要抄』に「久遠元初の自受用身とは、蓮祖大聖人のことなり」とはっきりいっております。しかも『血脈抄』も『産湯相承』も『本因妙抄』とともに日興門流中古の偽書であることは、皆様ご存知の通りであります。そういう偽書がいつ頃できたかということは、学問的には、ほぼ明らかになってきております。そのようなものによって日蓮本仏論を展開しようという発想がやがて池田本仏論になってくる。あくまでも久遠実成本師釈迦牟尼仏を離れたら、何々本仏、何々本仏論が出てくるのが宗教のキャラクターだと、私は思う。やはり彼らはそういう傾向を示そうとしております。日蓮本仏論が大石寺教学において完成したのは、祖滅四四〇年頃の日寛上人の『六巻抄』にあるということは、客観的に明瞭な事実であります。こういうわけで、創価学会では、日蓮を悪しく敬まうなとおっしゃられているなかで悪く敬っているわけであります。それから創価学会では、折伏と信仰の逆転がなされていることを心得ておかなければなりません。

大聖人は、一天四海皆帰妙法への熱情によってはげしく他宗を批判されました。これは今日教学となって私どもは継承しております。学会では、この大聖人の熱烈な信仰が逆転され使われています。折伏こそが信仰の実践であり、一人でも多くの信者をつくることが救済の確実な保証となるというのが、彼らの論法であります。信仰が基準であり、

信仰にみちびくための折伏の実践というのが正しい姿であり、それが逆転しているところに大きな問題があるのです。

「また、お題目を唱えている新興宗教の中には、一応お釈迦さまをたてまつっている教団もありますが、教祖を大導師とすることによって、ほんらいの大導師である日蓮聖人にしたがってお題目を唱える道を閉ざし、妙法蓮華経をこの世にひろめ、お題目によって一切のものを救い、幸せと平安をうち立てようとされた日蓮聖人の生き方をさしおいて、お題目を唱えているのです。これも、正しい唱え方ではないのです。

これらは、サルをはなれてキモを求め、池にうつった月を本当の月であるかのようにみなすものです。口でお題目を唱えてはいても、心と身にお題目の功徳をきざむことはできません。お題目にもとづいて仏性をよみがえらせ、仏の種をうえてみ仏になろうという誓いと目的を失わせてしまうものです」。

ほとんどの題目系教団において、祖伝をあまり説きません。日蓮聖人を無視はしていないけれども、日蓮聖人に随ってお題目を唱える道を閉しております。とにかく、日蓮聖人の生き方、大聖人と法華経との実存関係、法華経が日蓮聖人をとらえ、日蓮聖人は法華経の中に生命を投入した。大聖人は法華経をながめられただけでなく、法華経の中に生きられたのです。法華経と日蓮聖人の実存関係を離れて説こうとする新興宗教には、基本的に唱題の功徳はないと言い切ってよいと思います。

最後に、「日蓮宗のお題目は、お釈迦さまの慈しみの心と真実の救いをあかされている妙法蓮華経を、一心に信じて唱える正しいお題目です。お題目を口と心と身に唱えるようすすめ、みなともにみ仏の道に入って、まことの幸せと平和をめざされた日蓮聖人の生き方にしたがって、お題目を心すなおに唱えてゆきましょう」、これが日蓮宗のお題目でありますが、これを相手の機根に応じて説明することが大切であろうと存じます。

後半では、新興宗教がどうして伸びるかということについて、お話し申し上げます。

端的に申しまして、日蓮教団を含めて、既成仏教教団のよってもって立っている社会的基盤は、社会科学でいう旧

中間層であります。それに対して新興宗教が狙っていった社会層は、新中間層といわれる社会層であります。どんどん旧中間層は、人口減をきたしておりますが、新中間層は益々増える一方であります。日蓮宗新聞の社説であつかった時にびっくりしました。新中間層の人口は七割を超えています。旧中間層というのは、伝統的な農民階層、都市及び都市周辺の自営業者階層を典型とするものであります。マルクス的な分析によりますと、資本主義的な階級分解がまだなされていない部分として位置づけられる階層であります。また、新中間層とは、現代社会になって量的に増大した階層であり、比較的大きな組織に雇われて事務をしたり、販売をしたり、製造をしたりしている労働者・サラリーマンを典型とする都市的勤労者階級をさしております。

このことは、今日の仏教教団の置かれている位置というものを考える上で非常に重要なことです。従来の仏教教団は、その主なる基盤を旧中間層においていた。そしてその教化の方法・体制は、まさしく旧中間層的な性格を濃厚に持っております。つまり旧中間層は定着性を持っている、家族の構成から申しましても、代々そこに住んで同じ仕事をしていますから、家の意識が非常に強いので、その宗教意識においても祖先崇拝的傾向を当然強く持っています。

また従来の仏教教団の檀家制度は、江戸幕府が人々を社会的移動をおさえるという統制機能をそれに与えたことからも明らかなように、定着性の強い旧中間層にこそ相応した教団体制であったということができます。そして現に農村においてはもちろんのこと、都市におきましても、寺の檀家の有力メンバーをみれば、ほとんど旧中間層であります。移動の可能性の高いサラリーマンに総代を持っていかないのは、定着性の低さからいって、現在の寺檀体制の中では、中核メンバーになりにくいという状況があるからです。

さて、家族の構成といいますと、新中間層は全くの核家族で家の意識というものはありません。従って先祖崇拝感情というものをほとんど持ちあわせません。従来、こういう人の意識、家や先祖崇拝にうったえるということを重要な手段としていた仏教教団のこれまでの教化方法は、この核家族階層に向っては、はなはだ無力なものになってきて

いるという認識を持たねばなりません。先祖代々続いている旧中間層は、ご先祖様のお蔭ということもわかるけれども、新中間層では、死人はあっても一人か二人で、しかも両親と子供のような身近な存在であり、死者を悼んだり懐しんだり涙をこぼすという気持ちはあっても、崇拝的な感情を持つことは乏しいのであります。世代を超えた家の存続がありませんから、死者は早晩無縁となっていきます。このようなことも、現在の寺檀体制の中で、新中間層が周辺的な取り扱いしか与えられていない原因にもなります。

仏教教団は、こういう階層に対して教化面からいっても、組織面からいっても、完全に手をこまねいているばかりか、かえって遠ざけている状態です。その原因は、現在の社会的基盤、並びに教団体制の性格にあります。ところが、現在の社会においての新中間層は、益々その数を増やしている。それに対して既成教団の基盤を構成している旧中間層は、どんどん減少している。この状態が、今日の新興宗教の繁栄をもたらした最重要の社会的背景であると考えます。

また、この新中間層は、現代社会の諸問題を集中的にその身に被っている階層であり、いろいろな意味において現代そのものの典型的代表者であります。巨大社会の中における孤独と不安、また深刻な社会問題となってきている核家族化に伴う老人問題、家族問題。核家族的家庭には、新しい時代に似合う家族倫理の確立がありません。旧中間層には、先祖伝来の家風とか慣行があり、それなりに治まっていくのですが、核家族にはそういったものがありません。

そういうところから、社会病理現象というものがでてきます。いじめっ子問題にしても、単なる教育問題ではありません。一柳展也の金属バット事件にしても、社会病理現象として、日本中の問題として特別弁護がなされました。家族倫理の未確立に基づく不和や断絶というものが、親の間にあります。また母子・父子家庭の問題、住宅問題等、現代の困難な問題が新中間層に集中しております。そしてこの人たちの不幸感はかなり重いものがありますが、この不幸感に向って新興宗教は、「あなた、幸福になりたくないのか」と働きかけたのです。そして連れていかれた場所に

は、何百、何千といった信者がいるわけです。そういう所へ不安感と孤独感と不幸感を持った人が連れていかれると、天地に響くような南無妙法蓮華経の声の中で、南無妙法蓮華経の中味よりも大群集の中に自己肥大をとげ、力強さを感じ、偽りの満足感に漬ってしまうわけです。

このように新興宗教は、伸びてきたのでありますが、この現代の悩みを一身に引きうけている新中間層をして疎外させるような教団体制が、既成教団において続けられる限り、新興宗教がこういう階層に積極的にアプローチしていくのをながめている以外方法はありません。

「題目の輪を広げよう」というときに、どういう階層に向って、どういう方法が可能であるかというところまで踏み込んでしませんと、充分ではありません。要するに、私どもは、現代人に対する宗教教化を考えなければいけませんが、そこには、日蓮教団を含めた既成教団の社会的基盤という問題があります。既成教団が現代社会の中においていかなる位置にあるかという正確な認識なくして、現代社会人の教化や救済を叫んでもおぼつきません。今こそ、本当に現代にアプローチできる日蓮宗の教化というものを考えようではありませんか。

（本稿は、浜松市妙恩寺に於て開催された第二回静岡県教化研究会議の講演から筆録したものである）